
バカとバカ？のテストと召喚獣

雨風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとバカ？のテストと召喚獣

【Nコード】

N1931V

【作者名】

雨風

【あらすじ】

明久には小さい頃に別れてしまった親友がいた…
きっかけはFクラスに新しく来た転校生に会った時…というか明久
自体が忘れかけてた記憶が蘇ったためであった（笑）
これはバカな仲間達と主人公のドタバタ学園生活である…

プロローグ（前書き）

新しくプロローグを書き直しました！

プロローグ

（十数年前）

？「やっぱり、いつちゃうの…？」

？「…ああ。」

きっかけは両親の仕事の都合だった…

その時が来るまでぼくたちはいつも一緒だった…

時には一緒に公園で遊び、またある時はある人から“本気”で逃げるために一緒に走り回った…結局ぼくたちはその人に捕まったが；

3

それほど仲がよかった『あの子』から言われたのは突然の別れだった…

来週あたりには引っ越しが終わってしまい今日が最後の挨拶まわりになったらしく、一番にぼくの所に来てくれた。

？「ねえ…、ぼくたちまた会えるよね？」

本当は両親と一緒に行かないで一緒にぼくの家に住もうよと聞いて

みたんだ。

最初こそ喜んでくれたけど、「やっぱり だめだよ…」と言われた。

その理由は、「自分がいないと家の親、特に母さんがもの凄く寂しがるから…父さんと離れるよりも」という事らしい。

？「…また会えるさ、俺達は。」

少しだけ泣き顔になりながら言ってくれた言葉にぼくはすぐ泣きそうになった。

「…ああもう泣くなよ？こっちだって我慢してるんだからよ。」

「…う、うん。」

……

「…十年後だ」

「…ふえ？」

「十年後には何とか父さ…母さんを説得してみせるからさ？元気出せって、お前は元気な姿が一番なんだからさ？」

「… には負けるけどね。」

やっぱり…

「おい、それは俺の方がバカに見えると言う意味か？」

彼には…

「ちょっとまって！？、ぼくって元気一杯なバカな子に見えてるの！？」

かなわないなあ…

「あたりまえだ、気付いてなかったのか？」

「さっきまでのシミジミとした感じが台無しだぁー！ー！？」

「お前、台無しの意味分かってたのか…」

「やめて！？、そんな真面目な顔にならないで！？、別な意味で泣きそうだよー！」

「…あははは、やっぱりお前をからかう時の反応は面白いな。」

「うう〜。」

「それじゃあ『明久』、またな…」

「………また会おうね、『流儀』…」

後ろを向きながら手をふって流儀がいった後、やっぱりぼくはすく泣いてしまった。

「…流儀」

いつも流儀にはかなわなかったけど…

「…ぼくはぜえったいに流儀にギャフンと言わせてやる!？」

…目的がまったく変わっている事に気づかず明久は成長していった
…知識を除いて

…これは明久がFクラスの仲間？に出会う前の話である…

プロローグ（後書き）

side流儀

……あいつは本当に…

実は物影に隠れて様子を見ていたんだが…

「まあそこがあいつの良いところなんだかな…」

これはやっぱり母さんの説得を頑張らないとな…父さんはどうでも
いいとして…

とりあえず今は、

「リュウくん、アキくん、どこですかあ？」

この危機的状況をどうにかしないと…

…かれらが再び出会うのは十年後の事であるが…

「あつリュウくん、こんな所にいましたか。」

「げっ！？あ、玲姉さん！！、な、何故ココだと…ガタガタ」

「それは、リュウくんですから！」

もの凄くいい笑顔が今見ると凄く怖い…

「さあ、姉さんを困らせた二人にはお義母さんと一緒にボツキリと
OHANASHIしましうね？」

「字が違うよ！？くそ、ここまできて最後まで捕まってたまるかあ
————！！！！！」

いま自分のだせる全速力でそこから逃げ出した。

「…あら？リュウくん鬼ごっこですか？仕方ないですねえ」
ため息を吐きながら…

「それじゃあ姉さんも本気で捕まえないといけませんね」
凄く速さですぐ後ろまで走ってきた

「なっ……ぎゃああああ！！やっぱり速いイイイイ！？」

……………その前に二人（明久は気づいていない）の命運はいかに！？

（side out）

主人公設定（前書き）

主人公の設定を書いてみました！

主人公設定

オリ主人公設定

名前：天川流儀

あまかわりゆうぎ

歳は明久達と同じ

性格：頼りになるお兄さん

見た目：イケメンだが、とある人に女装させられていたら、皆から男の娘と言われている。

得意科目：英語、数学以外はAクラス並み

苦手科目：英語はCクラス、数学はBクラス並み。たまに歴史と古典がEクラス並みになる時がある

趣味：読書と筋力トレーニング、後なぜか演劇鑑賞

その他：自炊ができ、料理の腕は明久と同等。そのためか家族の中で特に母さんは凄く悔しがっている。

主人公設定（後書き）

感想などをお待ちします。

プロローグ・2 (前書き)

プロローグその2です
後書きに今後の予定を書きました。

プロローグ・2

文月学園：そこは新設した学園にして、現在の世間で最も話題を呼ぶ新技術『試験召喚システム』の試験採用校である…

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進んでいると同時に最新技術の実験場としても知られている学園でもある

それ故に、多くのスポンサーが付いているため、学費は他の学園と比べると極めて安い。

その学園に転校生として1人の学生が登校してきた…

「…む？、見かけない顔だな。ということはお前が例の新しく来た転校生か…」

「はい、あなたが西村先生ですね？なるほど、噂だ。」

「…一応聞いておくが、どんな噂だ。」

「なんでも、人体の限界を超えた最終兵器とか…あともうひとつは強靱な肉体をもつ鉄人とかですかね？」

「……一つ断っておくが、これでも人間だ。まったく一体だれだそ

んなデマを流した奴は」

「確かアナタにいつもお世話になっている親友から手紙などで……」

「……いやまで、そいつの特徴はまさか茶髪で凄いバカな奴じゃないか？」

「そうですね」

「……あいつは後で問答無用で補習だな」

と西村先生は片手を震わせながら言っていた。

……あいつ、だから余計な事は書くなと言っているのに……
まあ今さらもう遅いし、何より俺が言っちゃったしな……

会った時になにか奢っておくかと考えていた時に先生は箱から封筒を取り出した

「この中にお前に行くクラスが載っている、受け取れ」

「有り難うございます」

俺は受け取ってさっそく開けようとした時に先生から聞かれた。

「お前は振り分け試験を受けていない為そのクラスになるが本当にいいのか？、まだ学園長に言えば何とか試験を受けられるが……」

先生は何故か心配そうに言っている。

俺が行くクラスに何か問題でもあるのだろうか？

「大丈夫ですって、最初こそ気まずい感じになると思いますが、絶対仲良くなりますよ！」

できる限りの笑顔で答えたら、先生は苦虫を噛んだような表情でそうかと答えてくれた。

(問題はそれもあるがもうひとつあるんだがな)

「ならばよし！、しっかりと勉学に励むことだ！」

それじゃあこの後職員室に行くようにと言われて俺は頭を下げた後学園に向かって行った…

side???)

「まったく、この分だとあいつは全然変わっていないようだな…」

俺はため息をはきながら呟いた。

そして立ち止まって少し考えてみた。全然変わっていないと言っことは…

「まさか俺の事覚えていないんじゃないだろうな…」

何となくやな予感がした。

俺の予感は大体的中するからな……

もしそうなっているならば…答えは一つ

「からかってみるか、昔もそれで色々教えた事思い出したしな…」

あいつの頭脳はたまに旧型のテレビ並みに故障するからな…

まあそれはまた後にしてだ…

「…やっと帰ってきたな“ココ”に…」

本当に母さんだけは凄く粘っていたからな、…俺が一人暮らしする事を

途中から“あいつ”も参戦して一緒に行くとか言ってきた時にはさすがに驚いたが…

「あいつは絶対こっちに戻ってくるな…どんな手をつかっても」

その時は父さんにも頼むか、父さんあれでも親バカだからな…まあ話しかけてもあいつは無視してるが

「もし来たらその時は覚悟するか……それにしても、十年ぶりだし会うのが楽しみだな……」

……………「明久」

〔side out〕

〔side Fクラス〕

「……………ん？」

「どうした？明久」

「いや、何かどこかでバカにされてるような……」

「……………いつもの事」

「ワシもそう思うのじゃ」

「そつだ、気にするな明久」

「……よろしいのですか？本当に」

「……さてねえ、どじなることやら」

「彼は間違いなくAクラス並みの頭の持ち主です。それなのに何故……？」

「……フフフフフ」

笑い声が部屋中に響いた……

「………それなのに何故Fクラスに……」

歯車がはまり、僕達バカなクラスの学園生活が始まった……

ブログ・2 (後書き)

雨風です！

今日やっとブログ全部を書き終わりました。

明日からは少しずつストックを増やそうかと思っています。

文章に余裕ができればバカテストの問題を載せるので楽しみにして
て下さい！

それでは！

第一話（前書き）

遅くなりました！

第一話の始まりです

第一話

問題

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料にえらんだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムのかわりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい

姫路瑞希の答え

問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例…ジュラルミン

教科のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

問題点…ガス代を払っていませんでしたこと

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

合金の例：未来合金（ すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても。

天川流儀の答え

問題点：鍋自体の強度が足りないこと

合金の例：ジュラルミン

教師のコメント

合金の例はいいのに問題点が違います。

（職員室）

「あなたが新しく来た転校生ですね、私はFクラス担任の『福原慎』です。よろしくお願いします」

校門前で西村先生に言われた通り、職員室に向かいFクラスの担任に挨拶した。

先生の見た目は、寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを着たいかにも冴えない風体の人で、声も何となくだが覇気のない声だった。

「いえいえ此方こそ今日からよろしくお願いします」

「いい返事ですね、それでは一緒に教室に行きましょう。そこで改めてクラスの皆さんに自己紹介をお願いします」

一瞬だが少しだけ口元が笑ったように見えた。とりあえず第一人称は良かったようだ…

「分かりました」

俺は自分のクラスの担任と一緒に教室まで歩いて行った。

〈3F廊下〉

文月学園には、新・旧の校舎がある。旧校舎とは元々あった学校の設備であり、『試召戦争』を試験的に行うようになってから新校舎を増築したのである。

ちなみに1Fは職員室と各実習室。2Fは一年生、3Fは二年生、4Fは三年生用となっているらしい…

あらかじめ渡された学園のパンフレットにはそう載っていたが…

「明らかにAクラスだけ教室のスペースをとっているな、何故だ？」

「ああ、それでしたら教室に行く途中でAクラスを見れますから理由が分かりますよ」

歩きながら前にいる先生が答えてくれたので、俺はそうする事にした。

くAクラス前く

.....

Aクラスの前に来たので教室から余り見られないようにこっそり見たのだが……

「……何だ、この教室本当にこれでひとつの教室なのか？」

なんとも言えない設備ではかデカイ教室だった。

目の前に現れたのは通常の五倍くらいはあるつかという広さを持つ教室だった。

Aクラスの中ではちょうどHRが始まるようだ。

「皆さん進級おめでとございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子』です。よろしくお願いします」

Aクラスの担任は、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性のような教師であった。

そう彼女が告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。

「おいおいおい……」

なんて驚沢だよ、一体この教室だけでいくらつき込んだんだか……

そう考えていると、設備の説明に移ったようだ。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいますか？」

「……………」

さすがに、コレには驚きで固まった。

教室は五十人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があった

冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料が、エアコンは教室どころか各人に一台ずつ。それぞれが好みの温度に調整できるようになっているらしい。

更に天井を見てみると、天井は総ガラス制でありながらスイッチ一つで開閉可能となっており、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれていた。まるで高級ホテルのロビーみたいだ。

「参考書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなく何でも申し出てください」

どこからか紅茶の香りが漂ってくる。早速支給されている設備を使って紅茶を淹れた生徒がいるのだろう。

「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

「なに、霧島だと…?」

名前を呼ばれて席を立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女。物静かな雰囲気を持つ彼女は、その整った容姿と相まっ

ており、穢れを近づけない神々しさを放っていた。

クラス代表―つまりは二年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な成績を収めた生徒だ。

更に言うなれば、学年で最高成績を誇るAクラスでのトップはそのまま二年生のトップということになる。

「…『霧島翔子』です。よろしく願います」

「いや、気のせいだよな…」

記憶の片隅に何かが引っかかる。

あの子とどこかで会ったか？

「Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

担任教師の結びの言葉が告げられ、霧島さんが会釈をして席に戻っていった。

「もういいですか？それでは教室に向かいますよ」

「あっはい、分かりました」

後ろですつと待っていた（というか一緒にいるのを忘れていた）福原先生が聞いてきたので俺は返事をして、急いで先生を追いかけた

「……………?」

「霧島さん、どうかしましたか?」

「……………いえ」

…………… Aクラスの代表が何かに気づいた事に気づかずに……………

（Fクラス前）

……………俺は何故だかこの教室前をみて納得がいった。Aクラスの設備にあんなにつき込んだんだ、他の教室で一番つき込んでいない所があるだろうと。

「しかしコレはヒドすぎたる……………」

予想はしてたからあまりダメージはないが、やはり少し絶句してしまった。

「仕方ありません、何分Fクラスは元々旧校舎で余りの教室を使い、尚かつ設備や備品も各教室で使わなかった余りを有効利用して使ってますからね」

.....

現実には厳しいというのが今日からの教室で勉強するととなると、最初にあつたやる気も挫けそうになった。

とそんな気分になっている時であった。

「.....ハア、ハア、ハア」

ちょうどEクラス前あたりから走って来るピンク色の髪の女の子がいた。
遅刻だろうか？

「福原先生、あそこから来る生徒はもしか...」

「ええ、君の考えている通りFクラス最後の生徒ですよ。」

先生がそう答えた時にやっとその子はFクラス前に来た。
どうやら大分急いで来たようだ、息切れが凄く激しい。

「…ハア、お、遅れてすみま、せん」

「いえいえ、丁度よかったです。今から私が教室に入るので呼ばれたら二人とも入ってきてください」

「は、はい！ 分かりました…」

「同じく、了解しました」

先生はそう言うなりさっさと教室に入ってしまった。

「あの、君大丈夫か？ かなり息切れていたが…」

「だ、大丈夫です。振り分け試験の時に高熱をだしてしまいました、まだ病み上がりなんです」

「そうか、余り無理はするなよ？無理してまた熱がでたら元も子もないからな」

と言いながら俺はその子の頭を手をおいた。

「…ふえ、はあい、分かりました……」

やはり恥ずかしいのかその子は顔が真っ赤になった。

そんなやり取りをしている時だった…

「それでは、二人とも中に入って自己紹介をして下さい」

お、ついに順番がきたな。

「それじゃ、俺から入るから君は後から来てくれ」

「は、はい」

俺は普通だが、彼女は少し緊張しているようだった。

「大丈夫だ、リラックスして入って来るんだ。そうすれば進んでいけるぜ」

俺は笑顔でそう言いながら、彼女を元気づけた。

「……は、はい分かりましたあ」

緊張は解けたが、気のせいかさつきよりも顔が赤い。
大丈夫だろうか？

「……まあいいか、それじゃ行きますかねえ」

少しワクワクしながら俺は教室に入ってしまった。

「格好いいなあ……」

少しトロンと自分の世界に入ったその子を残して……

〈Fクラス前out〉

〈明久side〉

やっと出番だよ、みんなの自己紹介が終わって僕の番になった。こ
ういったものは出だしが肝心。沢山の仲間を作るためにも、僕が気
さくで明るい好青年ということをアピールしないとね。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んで
下さいね」

「ダアーリイン」

野太い声の大合唱で言われた。思った以上に不愉快だった。

「ー失礼。忘れて下さい。とにかくよろしく願いします」

席に座るも、吐き気が収まらないまま、自己紹介は進んだ。

丁度だいたいが終わった時だった…

「自己紹介の途中ですみませんが、転校生と最後のFクラスの生徒が来たので、今から紹介します」

そう先生が言った途端、クラスのみんなに戦慄が走った…

「先生、その子達は女の子ですか!?!」

「美少女ですか!?!」

「かわいい子でしょうか!?!?」

……………全部女子限定の質問ばかりなのは何故だろうか?

そりゃあ二人がきれいな子だったらいいなと思っけど……………

「……………アキが惚けていたらどうしようかな?」

…調節何本増やそうかしら」

… 僕の席から近い所で妙なオーラを出している子がいるから素直に喜べないや…

「それでは、二人とも中に入って自己紹介して下さい」

先生に言われて入って来た二人のうちひとりはなんと姫路さんだった。

僕は驚いけど、もう一人を見た途端凄いい勢いで席を立ってしまった…

何故ならその子は…

その時から、僕の昔の記憶が次第に蘇っていった…

〈 明久 side out 〉

第一話（後書き）

ストックを少しずつ増やしながら文章を書き出していることと
思います。

次回からは本格的に試験召喚戦争編を書こうと思います！

それでは

第二話（前書き）

大変お待たせしました！

遅れた理由は後書きに書きますのでよければみて下さい！

第二話

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- 『1 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『2 悪いことがあった上に更に悪いことがおきる喩え』

姫路瑞希、天川流儀の答え

- 『1 弘法も筆の誤り』
- 『2 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも1なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、2なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『1 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『2泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

僕は勢いよく席から立ち上がって目を大きく見開いた。

何故ならあいつは…

「あの、姫路瑞希といます。よ、よろしく願います…」

「天川流儀だ、よろしく。後ひとつ言っておきたい事がある…」

僕の、初めてのの…

「そこに立っているばか面とは昔からの親友だからもし何かそいつにしてみる、俺がブチノメす」

親友…てっちよつと待て!?

「ちょ、ちょっと流儀！？誰がバカ面なんだよ！！」

「何言つてやがる、お前以外に誰がいるんだ？」

こ、こいつは…

「ムキィー！！ 久しぶりに会った親友に言う言葉は罵倒しかないのかい！？」

「ああ」

「まさかの即答！？」

何て奴だ、少しは悩んでもいいじゃないか！！

……ん？、待てよ。

「まさか…また僕の事からかった？」

「ククっ、やっぱりお前はいつまでたっても変わらないな、安心
したぜ」

……ああ、またこのやり取りが出来るなんて夢みたいだ。 とり
あえず今僕のやるべき事はただ一つ

「死にくされえー！」

こいつを八つ裂きにするのだ！！

シュバツ（明久が地面を蹴る音）

ガン、バキィ！（勢いあまって天井の照明とぶつかる音と流儀に肘うちのカウンターをくらす音）

ゴロゴロゴロ！（両方の痛みにより、悶絶してる音）

「十年早いぞ明久、というか今のは本当にバカだぞ…」

「ぐおおお…」

明久が痛みに悶えているときに一人のがたいのいい奴とその後ろから三人の生徒がやってきた。

「お前が明久が言っていた最初の親友か。俺は雄二、『坂本雄二』だ」

「お主が天川という者か。ワシの名は『木下秀吉』じゃ、演劇部をやっておる」

一人は見た目は女性にしか見えないほどの美男子？で、

「…………『土屋康太』、趣味は盗さ…カメラ撮影と盗ちよ…音楽鑑賞だ」

もう一人は、聞いてはいけない事を言いかけた小柄な男子。

「最後はウチね、私の名は『島田美波』、よろしくね」

最後にこのクラスで二人？の女子の一人だ…

なるほど、こいつらが…

「ああ宜しくな、噂のゴリラと秀吉に土屋に島田」

「おい！？ 何で俺だけゴリラなんだ！！」

「いや手紙に載っている特徴からコイツだなと思ってな…後は俺の気まぐれだ」

「気まぐれかよ！？」

そんなやり取りをしていた時だった。

「あ、あの…」

「ん？、ああ悪いな姫路勝手に盛り上がって」

「い、いえいいですよ別に」

笑顔でそう言っているが、少しの間空気になっていたせいか若干寂しそうだ…

そつえばふと思ったんだが。

「なんで他の奴らはずっと黙っているんだ？」

俺と明久のやり取り前からずっと黙っているが…

「「び…美少女達が来たああー！！！！」」

「ああ、なるほど」

「ふえ！？」

姫路は突然の全員の絶叫に驚き、俺は何故美少女“達”なのか分かった。

「いよつしゃー！！わがFクラスに三人も美少女が入ったぜえええ！！！」

「ついに、ついに時代が来たー！！！」

「でも待てよ、天川さんはともかく何故姫路さんはFクラスになつたんだ？」

「ああ確かに。姫路さんの成績だと軽くAクラスに入れるのに……」

最初こそ浮かれたものの、一人の疑問にクラスみんなは静かになった。

「はい！、姫路さんに質問です。何でFクラスになっちゃったんですか？」

すると姫路は顔を赤くして答えた。

「じ、実は振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その答えを聴き、クラスみんなは『ああ、なるほどな』とつなずいた。

実は試験途中での退席は0点扱いとなるらしい。彼女は昨年度に行われた振り分け試験を最後まで受けることができず、結果としてFクラスに振り分けられてしまったというワケだ。（ちなみに俺は昨

年度は訳あって受けることができなかった為、同じく0点である（

そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言い訳の声が上がった。

「そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったて聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

…想像以上にバカなクラスだな。

「いてて…流儀、もう少し手加減してくれたらいいじゃないか」

やっと痛みがひいたのか明久が文句を言ってきた。

「よ、吉井君！？」

姫路がかなり驚いた様子だ。どうやら明久の事を知っているらしい…

明久も気づいたのか姫路に声をかけようとしていた…が

「ひめ…」

「姫路」

坂本に割り込まれた

「姫路。明久がブサイクですまんな」

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺が知っているあたりに、明久に興味を持っている奴がいたような気もするしな」

ほう、そんな奴がいるのか…ん？

「え？それは誰…」

「そ、それって誰ですかっ!?!」

姫路がかなり反応したな。…他にも後ろで島田と秀吉がピクリと反応したようだ。

「確か久保……」

久保？

「利光だったな」

「……………」

久保利光……明らかに男の名前だな。

「明久、元気を出せつて。声を殺して泣くなよ」

「もう僕、お嫁に行けないや……」

「お主の場合、婿に行けないが正しいのう」

「……………不憫」

秀吉がため息を吐きながら間違いを訂正し、土屋が明久の肩に手をおいて励ましていた……

「安心しろ、半分は冗談だ」

「え？残り半分は雄二？」

「さて、とりあえず姫路は俺の隣で天川は明久の隣でいいよな？」

「あ、はい。分かりました」

「流儀でいいぜ？分かった」

「ねえ雄二！残りの半分は！？」

「はいはい、その人達静かにしてくださいね」

明久が大声で聞いてきたせいで、パンパンと教卓を叩いて先生が注意してきた。

「あ、すいま……」

バキィツ ギギィイ、バラバラバラ……

「……………せん？」

叩いた衝撃なのか、教卓が傾いてバラバラになった。

軽く叩いただけで崩れるとは……どこまで設備が最低なんだか

「……………えゝ替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言うと先生は足早に教室から出て行った。

side 明久

「あ、あはは……………」

流儀の隣で姫路さんは苦笑いしていた。

ふと僕は思った。僕や雄二は実力だからともかくとして、彼女がこんなに酷い教室で学んでいくのはどうなんだろう、と

確かに本番で実力を発揮できなかったのはまずかった。体調管理だつて実力のうちかもしれない。

けど、体調不良の早退でいきなりFクラス行きはあんまりだと思つ。もう少しチャンスがあつてもいいじゃないか！！

こつなつたら意地でも設備を手に入れたい。

「……………雄二、ちょっといい？」

「ん？ なんだ？」

あくびをしている雄二に声をかける。

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

立ち上がって廊下に出る。その時、姫路さんと目があつた気がした。

「それで、話して何だよ？」

HR中だけあつて廊下には人影はない。ここなら安心して話ができ

そうだ。

「この教室についてなんだけど……」

〈明久 side out〉

〈流儀 side〉

……明久の奴、何かする気だな。まあだいたい想像はつくがな……俺はチラリと姫路の事を見た。……あいつは昔からそうだった。自分でやれる事は何かないかという考えで、どんな問題にも真っ向から立ち向かって……

「む？、どうしたのじゃ流儀よ？」

「……？」

俺がゆっくりと立ち上がった事に秀吉と土屋は疑問に聴いてきた。

「なに、ちょっと明久達の所に行くだけさ……おそろくあいつらしい考えでやるつもりだろうしな」

「ホウ……」

「……なる程」

二人は何か分かったのかもう聴いてこなかった。それじゃ…行くかねえ

） 流儀 side out ）

）再び明久 side ）

「…………… 僕らのクラスって設備がかなり酷いからさ、折角二年生になつたんだし『試召戦争』をやってみない？」 「戦争を、だと？」

「うん、しかもAクラス相手に」

「…何を企んでやがる」

急に雄二の目が細くなる。警戒されてるんだろうか。

「いや、だってあまりに酷い設備だからさ」

「嘘つけ。全く勉強に興味のないお前が今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが」

うぐつ。相変わらず勘だけは妙に良いな。

「あー、え〜つと、それはその……………」

ガラッ

「姫路の為だろ？明久」

理由を探しているときに流儀が廊下に出てきて言った。

「ど、どうしてそれを!？」

「まったくお前は…悩んでいる時には相談にのるって言うてただろ?」

「べ、別にそんな理由じゃ…」

「はいはい。今更言い訳は必要ないからな？」

「そうだな」

「雄二!それに流儀も本当に違っつてば!」

「それじゃ坂本、やるんだろ？」

「雄二でいい、決まってるだろ?それに明久に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っつてたしな」

「え?どうしてさ?雄二だつて全然勉強なんてしてないよね？」

確か僕ほどとはいわないが成績が悪いはず。

「世の中勉強だけじゃないって事を、証明したいからな」

「????？」

「それにAクラスに勝つ作戦もできたしな…流儀お前の成績は大丈夫か？」

「後で教えるさ。それじゃ教室に戻ろうぜ？」
先生も来たしな、と言いながら流儀と雄二に促されるまま、僕は教室に戻った。

〈明久 side out〉

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

壊れた教卓を替えて、気を取り直してHRが再開される。

「え、須川亮です。趣味は…」

特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生によばれて雄二が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿はいつものふざけた雰囲気は見られず、クラス代表として相応しい貫禄を身にまとっているように思えた。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

福原先生に問われたので、鷹揚にうなづく雄二。

雄二は自身に満ちた表情で教壇に上がり、僕らの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

「さて、皆に一つ聞きたい」

ゆっくりと全員の間を見つめるように告げる

間の取り方が上手いせいか、全員の間を見つめるように雄二に向けられた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが…」

そう言うと雄二の視線は教室内の各所に移り、一呼吸おいて静かに告げた

「…不満はないか？」

「大ありじゃあー!!」

二年F組生徒の魂の叫びが出た。

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！」

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声があがる。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「それでだ、これは代表としての提案なんだが……」

級友たちの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた

第二話（後書き）

本当なら土日を書いて更新するはずが、実家の事情で書けませんでした；

次回からは遅れる場合は活動報告に前もって書いておくのでよろしくお願いします！

次はDクラス戦前のお話です。ようやく主人公の実力の一部を書きますのでご期待を！

第三話（前書き）

お待たせしました！

第三話です。

後書きも見れたらみて下さい。

第三話

問題

以下の英文を訳しなさい

「This is the book she
if that my grandmother
had used regularly
ly.」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

天川流儀の答え

「これは私の祖父が愛用していた本棚です」

教師のコメント

惜しいですね。祖父ではなく祖母の愛用していた本棚です。

土屋康太の答え

「これは……」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 * x 」

教師のコメント

できれば地球上の言語で

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

「勝てるわけがないよ！」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だしな……」

「姫路さんと天川をがいたら何もいらななさ」

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がった。

…一部個人的に殴りたい奴がいたが。

試験戦争とは、『試験召喚システム』によって自分達が受けるテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出し、教師の立会いのもとで各教室で戦う事ができるのだ。

…だが、戦う以前に勝敗は決まってるようなものは意味がない。

しかも負けたら唯でさえ設備が最悪なのに、さらに悪くなるから」
そクラスのみんはやる気がなかったのだ。

しかし雄二は、

「そんな事はない。必ず勝てる。いや俺が勝たせてみせる」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言したのだ。

「何をバカな事を」

「できるわけがない」

「何の根拠があつてそんな事を言う？」

否定的な意見が教室中に響き渡る。

確かにどう考えても勝てる勝負だとは思わない。

俺はそう思いながら次の言葉を待つ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っているしな」

この言葉を受けてクラスの皆が更にざわめく。

この学年最下位グループにどんな根拠があるんだ？

「それを今から説明してやるよ」

不適な笑みを浮かべて、壇上から皆を見下ろす雄二。

「おい康太。畳に顔をつけて姫路のスカート覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

土屋は席を立って必死に顔と手を左右に振り否定のポーズをとっていた。

姫路は言われて気づいたのか、スカートの裾を押さえて遠ざかった。

土屋はというと顔についた畳の跡を隠しながら壇上に歩いていった。

……………今更隠してもバレているのだが。

「土屋康太。こいつがあ有名な、『ムツツリーニ』だ」

「……………！！ち、違っ」

何だそのあだ名は？そう考えているとクラス中がざわめきだした。

「ムツツリーニだと……………？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか？」

「だが見る。あそこまで明らかなきの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

豊の跡を手で押さえている姿は果てしなく哀れに見えた……

たとえどんな状況であろうとも、自分の下心は隠し続ける。
そういう異名なのだろう……が、

「?????」

姫路はよく分からず頭に疑問詞を浮かべているようだ。

……後で教えるか

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく
知っているはずだ」

「えっ? わ、私ですか?」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待してる」

まあもし試召戦争に至るとしたら、確かに彼女ほど頼りになる戦力
はいないだろうな。

「そうだ！俺達には姫路さんがいるんだった」

「彼女ならAクラスにも引けをとらないな」

「ああ。姫路さんと天川さんさえいれば何もいらないな」

……………一人さつきから熱烈なラブコールを送っているな。

「木下秀吉だっているぞ」

「……………余り頼りにしないでほしいのじゃが」

呼ばれた秀吉は少し困っているようだ。

「おお……………」

「ああ。アイツ確か木下優子の……………」

どうやら秀吉には姉がいるようだ。明久からの手紙の話だと双子の姉がいるそうだが…

「当然俺も全力を尽くすぜ」

雄二はそう言うのと片腕を握りしめた。

「確かに何だかやってくれそうだな！」

「坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが二人もいるって事だよな！」

少し気になる言葉が出てきたな…

“神童”？

…まあ後々思い出すか。

「それじゃあ、後は流儀、明久。二人とも前に来てくれ」

「ああ」

「わかったよ」

呼ばれたので俺と明久は席を立って壇上に歩いていった。

「吉井明久。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

観察処分者？…まさかとは思うが。

「それは確かバカの代名詞じゃなかったっけ？」

クラスの誰かがその致命的な意味を口にする。

「ち、違つよ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称なんだ…」

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二！」

「あの、それつてどういうものなんですか？」

姫路は小首を傾げている。頂点に近い場所にいた彼女にこの単語は馴染みがあるわけないか。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

「そうなんですか？それは凄いですね。試験召喚獣つて見た目と違つて力持ちつて聞きましたから、そんな事ができるなら便利ですよね」

姫路の目がキラキラと輝いている。若干の羨望と尊敬のこもつた視線を明久に送っているな

「あ、あはは。そんな大したもんじゃないんだよ？召喚獣の負担は、何割かが僕にフィードバックしちゃうしね」

負担がフィードバックする。…それはつまり、

「観察処分者つて事は、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しつて事だよな？」

「だよな…それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるって事になるね」

他のクラスの奴らがいった通り、痛みや疲れの何割かが本人にいくのだ。つまり戦闘にはあまり参加はできない。

「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべき所だよね」

「明久、実際に成績が悪いお前には何もフォローはできないぞ」

「……………流儀、その言葉は心にくるよ」

そう言われてもな…

「それで？流儀の成績はどのくらいなんだよ。Bクラスぐらいか？」

「俺か？俺はこれでもAクラス並みの成績だぜ？」

「何だと！？じゃあなんでAクラスに行かなかったんだ？」

雄二は驚愕して聞いてきた。

何でAクラスに行かなかったか？それはだな…

「明久をからかいたからだな（親友がFクラスにいるからだな）」

「…流儀よ、本音と嘘が逆になっておるぞ？」

「…コクコク」

秀吉と土屋がそう言ってきた。

「気にするな。ほとんどが嘘じゃないしな」

「流儀、一度ゆっくり話し合おうじゃないか？」

明久がそう言ってきたが無視する。

「まあとにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「当然だ!!」

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ!!」

「おおー!!」

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ
！」

「おおー！！！」

「お、おー……」

クラスの雰囲気には圧されたのか、姫路も小さく拳を作り掲げていた。

「明久、お前にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

どうやら明久は使者にされるようだ。本人はジト目で雄二に聞いている。

「…下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

なるほど、確かに大体はそうなるな…

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加える事はない。騙されたと思っ
て行ってみる」

「…本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っているんだ」

わずかな逡巡すらなく力強く断言する雄二。

…なんか怪しいな。

「大丈夫、俺を信じてみる。俺は友人を騙すような真似はしない」

更に追い打ちのような一言。

よし、決めた!!

「明久、俺も一緒に行くぜ?」

「流儀もいると心強いよ。わかった!それなら使者は僕がやるよ!
」

「あ、ああ。頼んだぞ」

若干変な顔になったが、クラスメイトと一緒に歓声と拍手で送り出してくれた。

俺は明久と一緒にDクラスに行った。

…やっぱりな。

「明久、少し聞け」

「何?流儀」

廊下に出てDクラスに向かう途中で明久に言った。

「Dクラスに宣戦布告したら俺の合図ですぐに走れよ?」

「心配してくれるのかい?大丈夫だよ、Dクラスは僕達には何もし

ないさ」

明久は雄二に言われた事を鵜呑みにしているらしい。

「一度経験させて学習させるか」

「なんか言った？」

「いや…何でもないよ明久」

俺は苦笑いして答えた。

…雄二は大丈夫とは言ってたが…

確実にやられるなこれは

…その後、Dクラスにつき明久が宣戦布告するために教室に入って行ったが……ものの数分後に明久の悲鳴が聞こえてきた。

「騙されたあ！！」

「……………ハア」

俺は親友が単純な性格なのに深くため息をした。

「ぎゃあああー!」

この先心配だな……

第三話（後書き）

第二話の後書きで書いた、主人公の能力の一部を出すつもりが…

ほとんど出していませんでした；

とりあえず成績のみを書いてDクラス戦の時に本領発揮させようと思っ
ています。

それでは次回は三・五話、番外編を書こうと思います。
内容は宣戦布告後のあたりです！

番外編 三・五話（前書き）

お待たせしました。

番外編更新します！

番外編 三・五話

問題

あなたの朝の食事の献立を答えて下さい

木下秀吉の答え

ご飯、味噌汁、焼き魚、漬け物など

教師のコメント

日本人らしい朝ご飯ですね。

天川流儀の答え

トースト、ハムエッグ、ポテトサラダなど

教師のコメント

天川君は洋風の朝ご飯なんですネ。

土屋康太の答え

ご飯、レバニラ炒め、ひじきの煮物、あさりの味噌汁など

教師のコメント

随分鉄分多めの料理ですね。

吉井明久の答え

水、砂糖、塩、油など

教師のコメント

…これでよく生きていけるなと先生は思います。

ドドドドド……………（廊下を凄い速さで走る明久）

ズバンツ！！（勢いよく教室の戸を開ける音）

「雄二っ！！よくも騙したなあぁ!？」

明久は凄い形相で雄二を睨みつけた。

「やはりな、そうくると思っていた」

…が、雄二は平然と応えた。

まったく気にしてないみたいだ。

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんな事も予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びを入れろよ！」

と、僕が雄二に怒っている時に流儀が戻ってきて僕に注意してきた。「明久。今回はお前が悪い、俺は言ったよな？合図をしたら逃げる」と

「うう、流儀！どっちの味方なのさ!？」

「俺はどちらでもない」

「僕に味方はいないのか！」

そんな事言っても自業自得だしな…

そんなやり取りをしている時、姫路と島田が明久の所に駆け寄ってきた。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん姫路さん。大丈夫だよ、ほとんどかすり傷だし」

姫路はどうやら明久の服装の状態から見て心配してるようだ…まあ所々制服破れてるしな。

「吉井、本当に大丈夫なの？」

島田も心配してるようだ。なんだ、結構明久も女子に心配してもらってるんだな。

「平気だよ。心配してくれてありがとう島田さん」

「そう良かった…。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」
前言撤回

「ああっ！もうダメ！死にそうだよ！」…明久自身の心がな

「むう…。明久よ、無理なら肩をかすがどうじゃ？」

「……同じく」

「うう。秀吉とムッツリーニだけだよ、僕の味方は……」

残りの二人は信頼がある…か。

「……」

女子二人は黙ってその光景を見てるが、どうやら面白くないようだな。

「それじゃ、今からミーティングを行うから屋上に行くぞ」

そう言うと雄二は教室の外に出て行った

「まあ明久よ、お疲れ様じゃ」

「あ、ありがとう秀吉」

「……サスサス」

「ムッツリーニ。覗いていた時の畳の跡ならもう消えてるけど？」

「…!!(ブンブン)」

「いや、今更否定しても意味がないぞ」

「だよな?ムツツリーニがHなのは知ってるし」

「…!!(ブンブン)」

「ここまでバれているのに否定し続けるとは、ある意味凄いな」

「…ちなみに何色だったの?」

「みずいろ」

即答したか…

「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いよ」

「…!!(ブンブン)」

そうやってのんびりと教室内で話をしていた時だった。

「ほ、ほら吉井。アンタも来るのよ」

ぐいっと明久は島田に腕を引張られた。

「そ、そうですよ吉井君。一緒に行きますよ」

そして何故か姫路にも腕を掴まれて、両方から引張られている…

「へ?ひ、姫路さんに島田さん!?!ちよ、ちよっと引張る力が強く

ない？」

確かに俺から見ても不自然だな…

「あ、あの。ひめ「き、気のせいよ！それじゃあ行くわよ」「そ、
そうですね。行きましようか」あれ？ちよつと聞いている！？だから
引張らないでえええ！！」

「うわぁ…」

「……合掌」

「むう…」

明久の奴、半泣きだったな…

く屋上にてく

雲一つない空から眩しい光が差し込む。そして春風とともに訪れた
陽光に、風ではためく二人の女子のスカートを注視している土屋を
除いて俺達は、全員目を細めた。

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

フェンスの前にある段差に腰を下ろしている雄二が聴く。

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

俺達もそれにならって各々腰を下ろす。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね」

「そうなるな。だから明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるんだぞ?」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

まさかこいつ…

「明久。まさか仕送りを全部ゲームかマンガに使ってないよな?」

「い、いやそんな事あるわけないじゃないか」

それじゃなんで目を泳がす。

「…明久。正直に言え」

「い、一応食べてるよ」

「…あれは食べていると言えるのか?」

雄二の横槍が入る。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って…水と塩だけだろっ?」

雄二が哀れむような声で言った。

…水と塩だけか?

「失礼な！ちゃんと砂糖だつて食べているよ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「同感」

お前なあ…

「仕方ないな。俺特性のサンドイッチをわけてやるよ」

「さすが流儀！久しぶりに固形物を食べれるよ！！」

「…むしろお前が今までそれだけで生活していた事に呆れたんだが」
仕方なく朝早くに作っておいたサンドイッチを二、三個渡しながら
言った。

「へえ〜うまそうだな。明久一つわけてくれよ」

「流儀は昔から料理が上手いんだ。…半分こだからね？」
「いや、お前程じゃないさ」

「む、という事は明久も料理が上手なのかう？」

「ああ、そんじょそこらの店にも負けないさ」

一度料理してみても普通に明久は上手かったしな。

何故かみんな目をそらし、顔を赤らめた
なんだ？

「どうしたお前ら、顔が真っ赤だぞ？」

「いや、
（何でもないよ？）」

「ぐう…反則だろ」

「な、何なんじゃこの感じは？」

「……（ポタポタポタ）」

「は、はわわわ／／」

「／／／／／／」

とりあえず明久、お前は地球語を話せ
土屋、鼻血が出ているぞ。

と、俺が疑問で考えている時だった。

「あ、あの…！」

「どうしたんだ？姫路」
若干顔を赤らめている姫路が言った。

「そ、それじゃ今度は私が吉井君にお弁当を作ってきてもいいですか？」

「え？いいの？」

明久は何気に嬉しそうだ。

「はい。明日のお昼でよければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

雄二はからかっているようだが、明久は純粋に喜んでるな。

「明日も塩と砂糖以外のものが食べれるよ！！」

純粋に喜ぶ理由がそれだしな…

「…ふーん、瑞希って随分優しいんだね吉井、'だけ'に作ってくるなんて」

島田は面白くないのか言葉に棘がある。

「あ、いえ！皆さんにも…」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

俺達にも弁当を作ってくれるのか…

「それは楽しみじゃのう」

「……（コクコク）」

「お手並み拝見ね」

「そつだな。俺は一応作ってくるか、足りなくなったら困るしな」

「流儀も作ってくれるの？明日が楽しみだなあ」

明日のお昼について俺達は盛り上がっていった…

「さて、話が逸れたな。試召戦争に戻ろう」

すっかり忘れていた話し合いに戻る。

「雄二。一つ気になったんじやが、何故Dクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう」

「そついえば、確かにそつですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」雄二が鷹揚にうなづく。

「どんな考えですか？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」
成績でクラスが分けられたので、Eクラスは当然Fクラスより試験の点数はいいはずだ。

「明久。今いる俺達の面子をよく見てみる、理由が分かるだろ？」

俺は理由を教え、明久はその場にいるメンバーを見回す。

「美少女が三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!?!」

「ええっ!?!雄二が美少女に反応するの!?!」

「おい明久。俺はムツツリではないぞ？」

「流儀はムツツリに反応するの!?!どうしよう、僕だけじゃツツコ
ミ切れない!」

「まあまあ。明久よ落ち着くのじゃ」

と、秀吉が言う。多分美少女の中に入ってるな…

「う、うん。分かったよ」

ようやく明久が落ち着いたので、雄二が改めて説明する。

「ま、要するにだ。姫路に問題のない今、正面からやり合ってもE
クラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと
闘っても意味が無いということだ」

「それじゃDクラスとは正面からぶつかると難しいのか？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

と、明久が提案する。俺達の目的はAクラスであって、Dクラスじゃないしな……

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

ああ、明久達が廊下で話してた事か。

「あ、あの！」

と、姫路が珍しく大きい声をだした。

「ん？どうした姫路」

「えっと。さつき 言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさつき、姫路の為にって明久に相談されて「それはそうと！」」

雄二の台詞を遮るように、明久はわざと大きな声をだした。

「さつきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久の心配を笑い飛ばす雄二。

「お前が協力してくれたら勝てる」

このFクラスが勝てる…か。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは……最強だ」

根拠のない言葉だがなぜかその気になってくる。
雄二の言葉にはそんな力があつた。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……(グツ)」

「が、頑張りますっ」

「それじゃあ俺も頑張りますか！」

打倒Aクラス。

荒唐無稽な夢かもしれない。実現不可能な絵空事かもしれない…

でも、やってみないと何も始まらない。折角こうして同じクラスになつたんだ。何かを成し遂げるのも悪くない。

「そうか。それじゃあ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺達は勝利の為の作戦に耳を傾けた。

番外編 三・五話（後書き）

何とか小説は書けるのですが、どうしても半分書くのに二日もかかっちゃいます。

これは後々対策を考えようと思ってます。

今回はDクラス戦突入です！

第四話Dクラス戦（前）（前書き）

2ヶ月もの間、大変お待たせしました！

第四話前編投稿します！！

理由後書きに書きました。

第四話Dクラス戦(前)

問題 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $\{ \}$?
の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 『

姫路瑞希、天川流儀の答え

『(1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ? 『

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\pi/6$ 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X = \text{おおよそ?}$ 』

教師のコメント

おおよそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられませんよ。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

〈教室にて〉

「それではこれより回復試験を行います。テストはいくらでも受ける事ができますので頑張ってください」

「は、はい」

「分かりました」

俺と姫路は回復試験を受けている。

雄二がたてた作戦はこうだ。

最初に秀吉率いる前衛部隊と明久、島田率いる中堅部隊でDクラスに先制攻撃を加え、相手が大体弱まってきたら俺と姫路、代表の雄二で構成した本体でDクラス代表の『平賀源二』を討ち取るのである。が、問題なのは本体に組み込まれる筈の俺と姫路の点数が0点のままということだ。

姫路は振り分け試験で途中退席の為、俺は転入手続きの時に色々あった為だ。

そのため仕方なく雄二は明久達に先制攻撃の役割りを頼んだのだ。

「先生、次のテストをお願いします」

「分かりました。教科は何にしますか？」

「英語と数学、化学でお願いします」

「私は歴史と古典をお願いします！」

そのために俺と姫路は急いで試験を解いている。

…大体このくらいでいいかな？

「先生。俺はこのくらいで終わります」

「…十分すぎると思いますが、分かりました」

「えっ！！天川君はもう行くんですか！？」

姫路は凄く驚いているようだ。

そりゃそうだ、作戦だと俺と姫路は限界まで試験を受ける筈だからだ。

「なあに心配するなって。作戦の”本当”の本命は姫路、お前なんだから」

俺は苦笑して姫路の頭を撫でる。

「あう／＼…で、でも」

若干顔が赤くなつた姫路だが、やはり心配のようだ…

「俺は大丈夫だよ。むしろ今危ないのは明久達の部隊だ、援護に行つてくるよ」

俺は何とかなるのだが、問題は明久だ。ただでさえアイツには観察処分者というハンデがあるし、何より俺がない間勉強は余りやっていないと思うしな…

「わ、分かりました。頑張つて下さいね」

姫路は信じてくれたのだろう、笑顔で応援してくれた。

「ああ、行つてくるよ」

俺はそう姫路に返事し、教室を出た。

（なるべく早めに明久達に合流するか…）

そう思うと俺は、急いでDクラスの廊下に走つていった。

…流儀が教室を出た数分後。

「やっぱり天川君は格好いいな… / /」

「……………（かなりの結果でしたね…）」

姫路はさっきのやり取りで赤くなり、担当の福原先生はテストの結果をみて驚いていた…

流儀本人はこの事に気づかず、後に大変な事になる…

〈明久side〉

「いたぞ！Fクラスに数学で勝負だ！！」

「くそっ！コッチも応戦するぞ。サモン！」

Dクラス 及川拓造

数学 85点

VS

Fクラス 加藤彩都

数学 55点

相手の召還獣にやられる加藤君の召還獣。

「吉井！ 木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわ！」

秀吉達は前衛部隊だったから遂に交戦になったか…

(さあ来い！ この負け犬が！)

(て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！)

(黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな)

(た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐え切れる気がしない！)

(拷問？ そんな事はしない、これは立派な教育だ。 補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎といった理想的な生徒に仕立て上げてやるっ！)

(お、鬼だ！ 誰か、助けっ… イヤアアア (ボタン、ガチャ)

援護に行きたいけど仕方ないね…

「わかった！ 島田さんは中堅部隊全員に今から言う事を通達して
！！」

「わかったわ！ 何て伝えるの？」

僕が今出すべき指示はただ一つ。

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

殴られた。しかもグーではなくチヨキで。

「目が、目があっ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！ アンタは部隊長でしょう！ 臆病風に吹かれてどうするのよ！」

その覚ますべき目に激痛があるんですけど！！ そういった台詞はせめてグーかパーで殴った後に言ってほしい！

「いい、吉井？ うちの役割は木下の前衛部隊の援護でしょう？ アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前衛を維持するの！」

と、島田さんは僕に説明する。

確かにそうだ。僕達が逃げ出したりしたら前衛で頑張っている秀吉達は補給ができないじゃないか！

それなのに、僕は戦死ペナルティの補習が怖くて逃げだそうなんて…

「ごめん、僕が間違っていたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えるよ」

「ええ、その意気よ。それにそこまで心配する事もないわ。個別戦

闘は弱いかもしれないけど、これは戦争なんだから多対一で戦えば良いのよ」

「そうだね、よしやるぞ！」

「頑張るわよ、吉井！」

拳を挙げる僕達。大丈夫！僕らならやれる！

と意気込んでいると、島田さんの所に報告係がやってきた。

「島田、前衛部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

……………あれ？

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

さっきと言っている事が全然違うんだげど…

「そ、そうだね。僕らには荷が重すぎたんだ」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

そう言つと僕らはFクラスに向かって後退しようとした。

「ん？ 横田じゃない。どうしたのよ？」

振り返った先には本陣に配置されているはずの横田君がいた。

「代表より伝令があります」

メモを見ながら横田君がハキハキとした声で告げる。

「『逃げたら殺す』」

「全員突撃ーっ！」

気が付いたら戦場に向かって全力ダッシュをしていた。

それもこれも、Fクラスの勝利を思っていること。

すると、前方からこちらに向かって走ってくる秀吉がいた。

「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

「うん！ 秀吉は大丈夫だった？」

「うむ。戦死は免れておるが、点数はかなり厳しい所まで削られてしまったわい」

と、息をきらせながら秀吉は言った。

「そうなの？ 召還獣の様子は？」

「もうかなりへ口へ口じゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

「そっか。それなら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「そうじゃな。全科を受けている時間はなさそうじゃが、一、

「二教科でも受けてくるとしよう」

言うや否や、秀吉とその後ろにいた前衛部隊に配置されたクラスメイト達は教室に向かって走っていった。

出陣した時より人数が少ないのは補習室に連行されたからだろう。

そう考えていると隣を走る島田さんが叫んだ。

「吉井、見て！ 五十嵐先生と布施先生よ！ Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

見ると二年生化学担当の二人の先生が渡り廊下にいた。

なるほど。学年主任だけだと勝負に時間がかかるから、立会人を増やして一気に片をつけにきたってわけか…

道理で秀吉達が予定よりも早く引き返してきたわけだ。

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなしね。60点台常連よ」

うーん、流石はFクラス。お世辞にも良い点数だなんて言えないな。

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近付かないよう注意しながら学年主任の所に行こう」

「高橋先生の所ね？了解！」

僕達は既に戦闘が行われている渡り廊下で目立たないように隅へ移動したが、

「あつ、そこにいるのはもしかやFクラス的美波お姉さま！ 五十嵐先生、こっちにきて下さい！」

「くっ！ むかったわ！」

Dクラスの一人に島田さんが見つかってしまった。

…でもお姉さま？ 島田さんの知り合いかな？ それならば…

「島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！」

「ちよっ…！ 普通逆じゃない!?」ここは僕に任せて先を急げ!」
「じゃないの!？」

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！」

「よ、吉井!このゲス野郎！」

「お姉さま!逃がしません！」

「くっ、美春! やるしかないって事ね…!」

島田さんは覚悟を決めたようだ。

相手のDクラスの子は既に召還獣を喚び出していた。それに応えるように島田さんも声をだす。

「ーサモンっ！」

喚び声に応えて現れた召還獣は、軍服姿で手にサーベルを持っているという点以外は、島田さんにそっくりだ。ただし身長は80センチ程度で、その姿を一言で表現するなら、『デフォルメされた島田美波』ってところだ。

相手の方も同様にデフォルメされた自分の分身を従えている。向この武器は普通の剣みただけ。

「お姉さまに捨てられて以来美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました…」

「ちよっと！ いい加減ウチのことは諦めてよ！」

いよいよ戦闘が始まり、召還獣同士が睨み合っている。

「ところで島田さん、お姉さまってー」

「嫌です！ お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ 私は普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

「このわからずや！」

…なんだか、島田さんが遠いよ…

「行きますお姉さま！」

ガキンツ！！

掛け声とともに島田さんの召還獣に剣を振り下ろす清水さんの召還獣。

島田さんも何とか応戦しているが、

「くっ！！！」

やはり点数が相手のの方が上なのか防戦一方だった。

Fクラス 島田美波
化学 60点
VS
Dクラス 清水美春
化学 94点

…明らかに30点も差がある、ちなみに僕は化学は20点しかとれなかった。

「はあああっ！」

「やあああっ！」

罅迫り合いが何回も続く…

が、その直後に島田さんの召還獣が力負けして得物を取り落とした。
「ここまでです、お姉さま」

切っ先を島田さんの召還獣に向けながら清水さんは言った。

「い、嫌あー！補習室だけは嫌あっ！！！」

島田さんが取り乱す。

そりゃ誰だって補習室は嫌だね。

「補習室？…フツッ」

楽しそうに笑いながら、清水さんが島田さんの手を引っ張る。

「あの清水さん、そつちには保健室しかな「さあお姉さま、いきましようか。今の時間なら保健室のベットはあいていますし」「…僕は無視ですか」

なんだろう凄く悲しい…

「よ、吉井助けて!?!。じゃないと今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするのよ!」

だろうね、さすがに僕でも分かるよ…でも、

「殺します…。美春とお姉さまの邪魔をスル人八、全員コロシマス…」

少しずつ清水さんが何かに変化し始めてるから!

「ごめん島田さん、君のことは忘れない!」

「ああっ! 吉井! 何で戦う前から別れの台詞を!?!」

だって後が怖いし…

「邪魔者は殺します!」

島田さんの召還獣に攻撃を加えて動けなくすると、今度は敵がこつちにやって来た!

ま、まずい!

「くっ! こうなったら僕も「五十嵐先生、代わりに受けます!」

サモンっ!?!」「…へ?」

覚悟を決めて立ち向かおうとした時だった。

後ろから聞き覚えのある声が響いた…

「り、流儀!？」

「こんな事と思っていたが、明久。少しは勉強頑張れよ…」

僕の後ろにはいつの間にか流儀が来ていて、頭に手をおいて呆れていた。

凄く腹立つのは何故だろう…

〈明久side out〉

〈流儀side〉

さて漸く明久達と合流したわけだが…

「…どんな状況なんだ？明久」

島田がDクラスの女子に捕まっているが

「…島田さんが勝負に負けそうになってね、そしたらDクラスの清水さんが補習室ではなく保健室に行こうということに」

……………なる程。

「あゝ何だ、人の趣味だから他人がとやかく言う事じゃないが、そういう事は別な所でやれ」

「ちよつ！！ 流儀助けてくれるんじゃないの!？」

説得が微妙な為か、島田はかなり焦っているようだ。

すると聞こえたのか清水が反論してきた。

「あなたも邪魔する気ですか？ ならばあなたも容赦しませ…」

ん？何だ？何で俺の顔を凝視しているんだ？

そんな事を考えていると清水がプルプルと体を震わせながら言ってきた。

「お、お姉さまと呼んでも良いでしょうか？」

……… ああなる程な

「断っておくが俺は男だ」

「で、ではお兄さまと！ お兄さま！美春とお姉さまとで一緒に保健室に行きましょうっ！！」

「…っ！！」

うん、見るからに島田が焦っているな。

仕方ないな…

「清水、それは俺に勝つてから言うんだな」

「望む所ですっ！、いきますっ！！」

Dクラス 清水美春

化学41点

VS

Fクラス 天川流儀

化学300点

「……………へ？」

ドスッ！！

一瞬で決着がついた。

「ふう、それじゃあ西村先生この子をお願いします」

一瞬だったのでポカーンとしている清水を補習担当の西村先生に引き渡した。

「む？、おお清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに
来い」

西村先生に担がれて漸く我に返ったのか慌てて言ってきた。

「お、お姉さまとお兄さま！ 美春は諦めませんから！ このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいねえ〜」

若干半泣きで捨て台詞を残して補習室に連行されていった。

さてと…

「明久」

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻って化学のテストを受けてくるといいよ」

「吉井」

「僕は流儀と一緒にいるからさ、じゃあ流儀行こうか！戦争はまだまだこれからだよ！！」

「吉井いつ〜！」

「は、はいっ」

「…ウチを見捨てたわね？」

「記憶にございません」

「」「」………「」「」

何かこう、ヒシヒシと殺気が伝わってくるーただし島田からだが…

ぐキッ！ーゴキッ！ー

「……………覚悟はいいかしら吉井？」

手の関節をならしながらギリギリと近づく島田。

おお！ 明久の顔が段々青ざめてきているな。

「り、流儀！！島田さんを抑えて！このままだどこの辺りが血の海になっちゃうよ！！」

そうだろうな…だが、

「明久、自業自得って知っているか？」

「へ？知ってるけど…」

「ならいい、明久。今回は諦めて殺られる」

「字が違つよっ！？（ガシッ！）ちよっ島田さん！ 僕の制服を掴んでどこ行く気っ！？」

すると島田がにこやかに明久に答えた。

「KILLYOU」

あ、終わったな…

「明久、お前の事は忘れないぞ。だから安心して逝ってこい」

「だから字が違つよおお」……」

と、ズルズルと何処かに連れてかれながら明久が言った。

……………ふむ。

「それじゃ皆も見たように、明久と島田が個人的な用事で離れた。すぐに戻ってくると思うがしばらくは俺が隊長代理だ、宜しくたのむ」

Dクラスと戦つて生き残つたクラスの仲間に説明した。

皆は島田の事を見たせい、顔を青ざめていた。

「……りよ了解つ!!」「……」

さあ反撃開始だと思つた時だった。

何処からか悲鳴が聞こえる……。

「ギイイヤアアア!!」

……………。

明久だけ“復活”するのに時間がかかりそうだ……

第四話Dクラス戦（前）（後書き）

え、2ヶ月も遅れた理由を書きます。

具体的に説明すると学校の試験を8月に行い、その試験で赤点だった教科の再試験が9月に。

それで本来なら9月下旬に投稿するはずが今度は風邪をひいてしまい、寝ていました；

体調管理はしっかりしないといけないなど痛感しました…

それじゃあ次回作をいいます。後編では明久に代わり主人公が活躍する予定です！

それでは皆さん、本当にすみませんでした。

第五話Dクラス戦（後）（前書き）

あけましておめでとございます！！

大変お待たせしました！Dクラス戦後編更新です！！

後書き書きましたのでよければみて下さい。

第五話Dクラス戦（後）

アンケート問題

あなたが「今」ほしい事または物はなんでしょう？か？答えて下さい。

坂本雄二の答え

我がクラスの勝利

教師のコメント

素晴らしいです。流石はFクラスを指揮している人物ですね。

土屋康太の答え

輸血パック×12

教師のコメント

何があつたのですか？

吉井明久の答え

救急車

教師のコメント

このアンケートを出した君は何故そんなにボロボロなんですか？

「天川隊長！ 横溝がやられた！ これで布施先生側は残り二人だ！」

「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかない！ 援軍を頼む！」

「藤堂の召還獣がやられたそうだ！ 助けてやってくれ！」

「布施先生の所には念の為一人、五十嵐先生の所には三人を送ってくれ。藤堂の事は諦める」

大分やられてきたな、そろそろ俺の出番か？

「いたぞ！ Fクラスの隊長クラスだ！！」

「よし五十嵐先生、化学で受けます！」

「木内先生！数学をお願いします！！」

む？ 二人同時か、ならなんとかなるか。

「先生方、両方とも受けます！ サモン！！」

Dクラス金本&蔵内

化学 95点

数学 85点

VS

Fクラス天川流儀

化学&数学 400点

「「はい？」」

グシャ！！ ドスッ！！

一瞬で相手の召喚獣達は消えていった。

「バツバカな！？ よ、400点だと！？」

「Aクラス並みの成績を持っている奴が一人いると聞いていたけど
…」

「まっまさかコイツがそうなのかッ!？」

さすがに情報はDクラスに流れていたか…だが全部ではなかったか。

まあそんな事より自分の召喚獣をじっくり見てみるか。

全体的に黒い騎士甲冑を纏っているな…頭以外は。

それでさっき相手側の召喚獣を倒した武器は真紅の槍か…

オマケに召喚獣の片腕には金色の腕輪がついているな、何でだ？

「まずいぞ!! ああの召喚獣腕輪持ちだ!!」

「くつくそ!! 此処は一度陣地に退くか？」

「でっでも今止めておかないとこのまま陣地に行ってしまうよ!!」

「だが腕輪持ちは何らかの能力を持っているぞッ!？」

…なる程、大体理解はした。

テストである程度点数がいいと召喚した時に腕輪がつくみたいだな。

まあそれはそれとしてだ、今はなんとか俺だけでも防げるが時間の

問題だな…

ピンポンパンポーン《連絡致します》

どうするか考えている時だった、突然校内放送が流れた。

《船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています》

……………ん？、明久？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

まさかこれは…作戦か？

《左手の薬指を綺麗にしておいて来てほしいそうです、大至急行って下さい》

……………うわあ〜

「吉井隊長…アンタあ男だよ！」

「ああ、感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるな

んて！」

前衛部隊の仲間たちは感動しているな。それに比べてDクラスは…

「お、おい聞いたか今の放送」

「ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちにきてるぞ」

「おまけに前衛にはAクラス並みの隊長がいるし…奴らに勝てるのか？」

いい具合に士気が落ちているし、とりあえず今は安心だな。

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな！」

「絶対に勝つぞ！天川隊長に続けえーっ！」

こっちの士気は最高まで上がったな。とりあえず俺はDクラス部長の塚本を倒しておくか…

とそんな時だった、丁度明久が島田に連れてかれた方から絶叫が聞こえた

「須川ああああっ！！！」

明久……

〈Dクラス前廊下〉

「ひるむな！相手は所詮Fクラス、我々Dクラスの力をみせるのだ
！！」

Dクラス種山薫

化学 105点

VS

Fクラス近藤吉宗

化学 95点

「くっ！？ 皆負けるな！ 吉井隊長の無念を奴らにぶつけてやる
んだ！！」

何とか応戦している近藤の召喚獣、しかし10点の差で相手に押さ
れている…

「そつだ！ 吉井隊長がやってくれた事は俺達の勝利を信じてくれ
たからだ！！」

Fクラス柴崎功

物理 85点

VS

Dクラス鈴木一郎
物理 55点

相手の召喚獣を大槌で吹き飛ばす柴崎。

「うおおおお！俺達Fクラスを舐めんじゃねえエエ！！」

Fクラス田中明

歴史 88点

VS

Dクラス笹島圭吾

歴史 110点

一人倒した後にもう一人をボロボロのまま戦う田中。

うん、かなり良くなってきたな。このまま上手くいけばDクラス代表の所まで…

「っ！？ 天川隊長大変だ！！ あれを見てくれ！！」

「ん？ 何だ…っ！？ あ、あれは！？」

部隊の一人が指差した方向をみて驚愕した。なぜなら…

「皆またせた、Dクラス近衛部隊！！これより参戦する！！」

「マズいぞっ!? Fクラスは全員一度撤退だ!! 人ごみに紛れて攪乱するんだ!」

「っっ応っ!!」「っ」

Dクラスはどうやら苦戦している此処に近衛部隊を何人か出して一気に巻き上げるつもりらしいな。

「流儀、あと少しだけ持ちこたえてくれ!」

「雄二か! 了解!!」

やっと援軍の登場か、これで何とか…ん?

「なんだあれ?」

西側を担当してた奴らの更に向こう、Dクラス側に一人で戦っている奴がいるな、あれはまさか。

「すううがわあああ!どこだあああ!!」

「明久か…あいつのバーサク化は久しぶりにみたな」

確かあの時は父さんと戦った時だったかな……

「なっ!! Fクラスの観察処分者か!? 何でこんなに暴走して

るんだ!？」

Dクラス鹿本庇

DEAD

VS

Fクラス吉井明久(バーサク化)

WIN

ああ、やっぱり点数出される前にやられたか。

あの状態を元に戻すには時間が掛かるんだよな…

そんな事を考えているときだった。

「援護に来たぞ! もう大丈夫だ、皆落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動くんのだ!」

向こう側の士気が上がった理由は…あいつがDクラス代表の平賀か!

「Dクラスの本隊が動き出したな、向かえ討つぞ!」

「『『応っ!!』』」

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行くんだ!他のメンバーは囲まれている奴を助けてくれ!」

『おおー!』

平賀代表の号令の下、あつという間に雄二の周りがDクラスメンバ
ーで囲まれてしまった。

雄二の方は自分の周りに本隊や秀吉たちがいるからそうそうやられ
はしないが、こうなってくると戦況はかなり厳しい。

それに少しずつだが敵に囲まれつつあるな…どうするか？

「仕方ない、雄二！俺が道を作る。その間にDクラス代表を仕留め
てくれ!！」

「すまん流儀、野郎共聞いた通りだ！天川が道を作るから俺達の誰
かで代表を仕留めるぞ!！」

「「「よっしゃあ、まかせとけえ!！」「「

「く、来るぞ!? 向かえ討てえ!！」

Fクラス天川流儀

総合科目 4500点

V S

Dクラス10人分

総合科目 1500点

「ば、バカなっ!?!4000点越えだって!！」

「無理よっ!?! 点数が違い過ぎるわ!！」

「悪いがコレも勝負なんだ、全力でいかせてもらっ!！」

ゴッ!ズキシャ!!

『うわあああ!!!』

よし、今ので大分倒したな…このまま代表の方を削るか!!

「よし、Dクラス代表平賀源二にFクラス天川流儀がー」Dクラス
玉野美紀、サモン!！」 なっ!?!」

突然目の前に現れたのはDクラスの女子、どうやら近衛部隊らしい
な…

「ふう、残念だったね天川君?」

凄くほっとした顔で平賀君は答えた。

「平賀君安心していいのか、彼女だけでは俺は防げないよ？」
すると平賀君はにやりと笑った。

「ああ、分かっているよ天川君。少しでも防げばすぐに防衛陣形は復活するしね、それじゃあ玉野さん。頼むよ？」

「はい、分かりました…っ！？あ、あの天川君…！」

「うん？なんだい？」

何か驚愕しているけど、それに凄く顔を凝視してるような…

「あの、あなたと遠くにいる男の子…いや男の娘に今度着て欲しいドレスとかあるんだけどいいかなっ…！」

……………ん？

「ちょっと待とうか、君は勘違いしていると思うが俺と明久は男だからドレスなんて似合「大丈夫だよっ！！」だって私があるあなた達に合う服を選ぶから！！」 いや人の話を聞けよっ！？」

何だこの子はっ！？母さんやあの人並みに性格が狂っているぞっ！！

「…ゴホン、気をとりなおして頼むね？玉野さん。それと天川君、

すまない」

「そう思うなら止めるよっ！！クラスメイトだろ！？」

マズい…マズいぞこれは！！何とかしとめなくては！

「仕方ない、相手をするしかないか。それじゃあ後はたのむぞ……
姫路」

「えっ？」

トントン

「あ、あの……」

彼の後ろから、申し訳無さそうに姫路さんが肩を叩いた。

「あれ、姫路さんどうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかつた
と思っけど」

まあ普通はそう認識するか。彼女はFクラス所属だなんて普通は認識しない。

「いえ、そうじゃなくて……」

そう、作戦の中で最終兵器は俺ではなく彼女だ。こっそり忍び寄って代表を討ち取るという作戦であったが、成功したか。

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、此方こそ」

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

あつちはまだいいな、それじゃあコッチも終わらせるか。

「竹内先生、現代国語で受けます！」

「あの……わ、私もお願いします」

「承認します！！」

「あの……えっと……さ、サモンです！」

Fクラス 姫路瑞希 & 天川流儀

現代国語 339点 & 415点

VS

Dクラス 平賀源二 & 玉野美紀

現代国語 129点 & 115点

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながらも平賀君も召喚獣を構えさせ、相対する。
しかし、武器の違いがありすぎるな…なんだ彼女の武器は？背丈を
軽く超えている大きな剣だな…俺の方も人のことはいえないが。

「う、ごめんなさいっ…！」

その得物に似合わず素早い動きで相手に肉薄する姫路の分身。同時に
俺の方も相手の急所を貫いた。

相手の反撃も許さずに、一撃でDクラス代表を倒した。

「Dクラス代表平賀源二、討ち取ったり！」

そして、それは同時にこの戦いの決着となった。

第五話Dクラス戦（後）（後書き）

いやぁ……………すいませんでした!!

普通に更新するのを忘れていろいろやってました；

ストック作成に予想以上に時間が掛かってしまいました。

…やっぱりPCで書くべきか；

それでは次回作です！次回はDクラス戦後の番外編の予定です。
それでは雨風でした!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1931v/>

バカとバカ？のテストと召喚獣

2012年1月5日00時47分発行